

子ども中心の コミュニティづくりを めざして

東日本大震災と原発事故後の取り組み

2011年3月11日に東日本を襲った大震災と、その後の福島第一原子力発電所事故は、福島で育つ子どもたちに深刻な影響を与えました。

子どもたちは、長期化する避難生活や度重なる転居・転校、交友関係の断絶、家庭環境の変化など周囲が目まぐるしく変わる中で必死に適応せざるをえませんでした。心に秘めた悲しさ、寂しさ、怒りなどの思いを表現することもできず、またそれを受け止める余裕が、身近な大人にも、そして社会にもなかったのが実情だったといえます。

そんな中、ビーンズふくしまでは「うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクト」を立ち上げ、2011年9月から福島大学を中心に関係団体、ボランティアと協力して、土曜日の午後「未来のたね」活動として、実態調査を兼ねて仮設住宅で支援を実施し、同年12月から平日帰宅後の学習支援を開始しました。子どもたちは避難所生活時に受け入れ態勢のとれる学校へ転入していたため、バス登校が主でした。そのため、地域の子どもの交流がなかなか進まず、孤立が危惧されていたのです。以来、自治会・子ども会や地域のコミュニティと協力して、子どもたちが友達と一緒に勉

強したり遊んだりしながら、のびのびと育っていけるコミュニティを作ることにも努めてきました。現在までの延べ参加者数は1万人を超え、近年でも年間1000人程度の参加者があります。

震災後8年半たった現在、ほとんどの仮設住宅は収束し、避難してきた方は新居を構えたり、復興公営住宅に入居しました。以前、学習会に来ていた子どもたちも成長し、進学や就職が実現したことを笑顔で報告してくれています。

現在、活動に参加している子どもの実態も様変わりし、震災当時のことを家族から聞いたばかりの子どもがほとんどです。また、地域の多くの子どもたちを迎え、一緒に楽しく活動しています。地域の学校へ通い、地域の友達と遊ぶ、被災直後では想像できなかった姿が見られるようになりました。



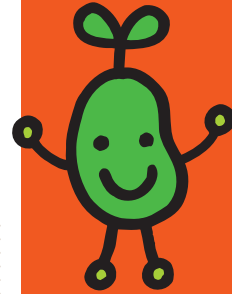
活動の様子～学生ボランティアさんと一緒に～



仮設住宅で遊ぶ子どもたち

ビーンズ 通信

vol.96



●発行日/2019年(令和元年)11月10日

●発行元
特定非営利活動法人

ビーンズふくしま

〒960-8066 福島県福島市矢剣町22-5 2F

TEL&FAX 024-563-6255

URL <http://www.beans-fukushima.or.jp/>

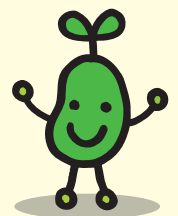
E-mail info@beans-fukushima.or.jp

NPO法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもやひきこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、1人1人に寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。

今後、これまで培ってきた利用者や保護者、関係者とのつながりや、地域に根付いた居場所としての機能を今後の活動へと繋いでいきたいと思ひます。

被災者の皆様へ、心よりお見舞い申し上げます

この度の、台風19号による被害にあわれた全国各地の皆様、
そして県内各地で被害にあわれた皆様に、心よりお見舞い申し上げます。
被災された皆様の一日も早い復旧を、心よりお祈り申し上げます。



避難してきた親子同士の 出会いが生まれた 子育てサロン



▲みんなのひとしづく
(避難されたママたちの体験談)

山形県では震災の被害はそんなに大きくなかったですが、被災地から人が来ると感じていました。山形市では体育館の一つが、6月末までずっと避難所として使われていました。避難所を出て次の場所に移る時、せっかく出来た親子同士のつながりがバラバラになってしまうと思いました。

また、私たちが行っていた子育てのひろばに、夕方、お母さんだけが来て、「避難して来ているんだけど、遊びに来ていいですか？利用していいですか？」と聞かれたことがあり、その時、初めて「自主避難」というものを知りました。今まで行ってきた子育て支援とは別枠で、避難してきた親子のための子育てサロンが必要だと感じました。

避難してきた親子限定の子育てサロン、子育てサロンままカフェ、では、子どもの遊びスペース、支援物資コーナーや情報コーナーを作り、山形の子育て情報や、生活情報のちらしを置いて情報発信をしました。避難するにあたって、家族と意見が違う状況の中でも避難を決めた方、夫婦で避難した方、それぞれ状況は違いましたが、不安や心配をみんな抱えていたと思います。

ここでは、同じように避難してきた親子同士の出会いがたくさんあり、同じ立場のお母さん同士で、おしゃべりできたことが一番よかったと思います。

ビーンズふくしまと繋がって

避難してきた親子は、いずれ福島に戻ることを考え、行き来しやすいことを意識し山形を選んだと思うんです。だから、状況が落ち着いてきたら、どんどん福島に帰りました。親子が福島に帰ったあとも前向きに生活できるように、避難状況の様子をビーンズさんに伝え、連携していきたいと思いました。

親子が福島に帰る選択をした場合、再び生活環境は変わります。避難してきた後、居場所を見つけ、生活を落ち着つけ、前向きになっていく過程をもう一度行うわけです。親子が再び前向きになれるよう、福島に帰った親子の同窓会を年に2回したり、ビーンズさんと連携して、福島に帰っ

た親子を芋煮会に招いたりしています。

私たちは乳幼児、ビーンズさんは就学後の支援と専門性が違うので、子どもの成長に合わせて、長い見通しを持ちながら支援ができたと思います。山形市にいて、福島に帰った親子の支援はできないので、信頼できるパートナーが福島にいることが一番ありがたかったです。

「ままカフェ」という名前は、山形県にあったサロンが、福島でもありますよ、という意味を込めて、私たちがやっていた「子育てサロンままカフェ」を引き継いでもらったんです。



ままカフェ@みなみそうま...
いつも20組ほどの参加！ ゆっくりお話しできる貴重な場として。



ままカフェ@しらかわ...
白河での子育てについて情



ママカフェ@ほんまつ ●託児スタッフに遊んでもらう子どもたち

避難経験が 成長の糧になるように

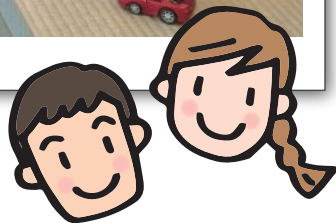
避難してきた親子は環境が急に変わったわけなので、私たちが支援を始めた当時は、生活支援がほとんどでした。それがだんだんと普通の子育ての悩みを聞くように変わりました。震災から8年経ち、子どもが成長したことで、悩み事も、進路のことなどに変わってきてます。また、山形県

に避難してきた当初はお母さんも、こっちに長くいる間に働き始めて、自立していきっているように思います。

「いろんなことがあったけど、いろんな経験をして今の自分がある。子どもも大きくなった」と、お母さんた

ちが避難した経験を振り返り、自分の中で意味付けし、次に活かすことができるような取り組みを、今、少し行っています。

現在、山形県に避難している人数はピーク時の10分の1くらい。どちらかという山形県に避難した親子は、福島に帰っているのが現実です。お隣同士の県で、お母さんたちも、山形で過ごした時期を成長の一つの過程だった、と思えるようになってきたと思うので、気軽に山形に遊びに来てほしいなと思います。



情報交換中!

野口比呂美
NPO法人
やまがた育児サークルランド代表



ふくしま 子ども支援センター ● 概要 ●



東日本大震災後、厚生労働省の要請を受け、恩賜財団母子愛育会が「東日本大震災中央子ども支援センター」を、被災した子どもの心のケアを専門的・継続的かつ安定的に行うことを目的として岩手・宮城・福島の被災3県に設置しました。

ビーンズふくしまは、2012年3月より「東日本大震災中央子ども支援センター福島窓口」として、福島県から委託を受け、被災した子どもや保護者の状況把握や支援ニーズのとりまとめ、子育て家庭への支援に関する情報の発信、被災児童や保護者及び支援者等への各種支援事業を行っています。

主な活動として県外へ避難している親子のための各地域での交流会、ふくしまで子育てをする母親のための場「ママカフェ」(県内6か所)を開催し、震災後の福島での子育ての困り事、不安な思い等を安心して話すことができる場として7年目を迎えました。地域ごとの課題と向き合いながら現地の団体の方々にも協力をいただき地域全体で子育て中の母親や子どもたちを支えています。

他に支援者研修、県内市町村事業への専門職派遣、「ふくしま結ネット」での情報支援を行っています。

支援スキームの変更に伴い2014年4月より「ふくしま子ども支援センター」と名称を変更しています。

不登校の数が 過去最高の16万人超えに

文科省、学校復帰をめざした支援のあり方の見直しへ

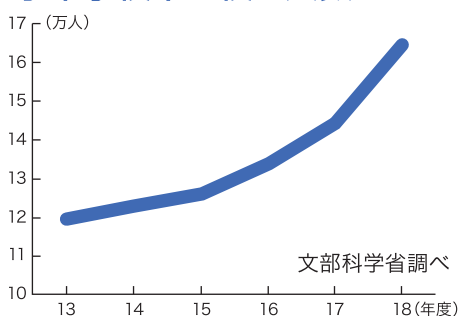
2018年度に年間30日以上欠席した「不登校」の小中学生が、前年度から約2万人増えて16万4528人となり、過去最多を更新したことが、10月17日文科科学省から発表されました。

2011年以降、毎年増え続けている不登校状況を受けて、文科科学省は、従来の「学校復帰」を前提とした支援のあり方の見直しに乗り出し、フリースクールなど学校外の施設に通う不登校生を「出席」扱いにしやすくする通知を、2019年10月25日付で全国の教育委員会に出しました。復学のみを目標にしがちだった教育現場の意識改革につなげる狙いがある、

との報道がされています。

また、すでに文部科学省からは、『不登校児童生徒への支援の在り方について』(2016年9月14日)の中で、すべての学校に対して、「不登校は問題行動ではない」という教育方針が通知されていますし、さらに、

小中学校不登校の人数



2017年に制定された教育機会確保法では、学校以外の教育機会を確保する施策を国と自治体の責務として明記しています。

「不登校」に対する文部科学省の考え方も大きく変化しています。ビーンズふくしまとしては、これまで同様、子どもたちが生きにくさを感じることなく、安心して様々な体験を通して学ぶことができる場を提供していくと共に、各自治体の教育委員会との話し合いも進めていきたいと思っています。

ご寄付の返礼品として、 トートバックを作成しました!

ビーンズふくしまは今年で20周年。利用者の方々と協力して何か作りたい! そんな想いから、このトートバックは誕生しました。利用者の方々に「豆」のイラストを描いて頂き、20周年にちなみ20個並べたデザインにしました。利用者の方々の想いも詰まった素敵なバックです。

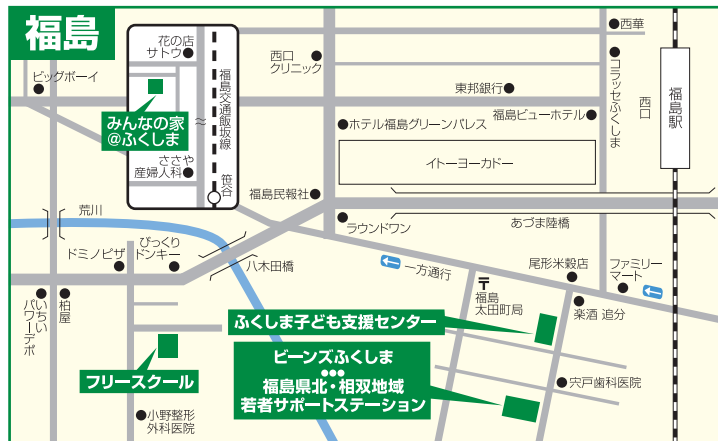
A4サイズ、マチ付きグリーンとオレンジの2色展開、様々な用途でお

使いただけだと思います。

1,000円以上のご寄付で1枚返礼いたしておりますので、お気軽にお問い合わせください。

(電話024-563-6255)

今後も、子ども・若者の生きる力を地域全体で育める社会を、皆様とつくりたいと思っていますので、トートバックもぜひ手元に迎えていただくと幸いです。



●ビーンズふくしまのホームページ こちらへアクセス → <http://www.beans-fukushima.or.jp/>